栗東国際交流協会 会報

Koryu

Ritto International Friendship Association

2000年9月号
（VOL.4）

栗東国際交流協会
〒520-3088
滋賀県栗太郡栗東町安養寺1-13-33
TEL 077-551-0293 FAX 077-554-1123
E-MAIL rittoing@mediawars.ne.jp
編集 総務広報委員会

第9回異文化交流サロン（文化事業委員会）

潮干狩りバスツアー 2000年7月15日(土)

日差しも強くなく、雨も降らずという絶好の潮干狩り日和の7月15日(土)に、第9回異文化交流サロンが行われ、約40名（うち在住外国人19名）が参加されました。潮干狩りは日本の伝統的な夏の海のレクリエーションの1つ。これを体験していただこうと文化事業委員会では2回の委員会を開催し、企画しました。

当日は午前9時に栗東町庁舎を出発。外国人の参加割合がこんなに多いサロンは今回が初めてで、スタッフもビックリ。バスの中ではビンゴゲームで盛り上がりました。途中鈴鹿峠を越えると、「これより海抜0mまで下がっていきます。」とガイドさんの案内に改めて驚き。（滋賀県はそんなに高く位置しているんですね。）

出発して2時間もすれば三重県津市の御殿場浜へ。休憩所に荷物を置いて早速網と熊手を持って浜で潮干狩り。丁度潮が一番引く時間帯で絶好の時間。日本に来て潮干狩りはもとより初めて海に来たという人もいて、少々興奮気味。ある中国人男性は「太平洋が見られて良かった。」と話し、あるアメリカ人女性は貝を探る手を休めて海に目をやった時、ちょうど飛び魚が二匹、まるで追いかけっこをしているように跳ねたのを見られて感激。

1時間も探し続けると、全員が大量のアサリを取ることができました。中には蛤やアオヤギを取った人も。

昼食は休憩所で貝汁・貝めし・活貝炭火焼きの貝づくし。貝めしはおかわり自由でたくさん食べました。会話もはずんでとてもおいしい食事でした。

帰りはドライブインでお土産を買って、潮干狩りで採った貝とたくさんの思い出と共に家に帰りました。

今回のサロンで友達になった方、また次回のサロンでお会いしましょう。

今回参加できなかった方、次回サロンをお楽しみに。

第13回滋賀県ミシガン州友好親善使節団派遣

（交流事業委員会）

2000年7月26日(水)～8月6日(日)

滋賀県の姉妹州ミシガン州の家庭に宿泊し、生活体験等を通じてアメリカ社会、文化を理解し、国際理解・国際親善を深めることを目的として約70名の団員が派遣され、栗東町からは和田滋子さん、小山真季さん、宇野いづみさん、太田善定さんの４名が参加されました。４名は２回にわたる県の説明会、前回栗東町から参加された方との情報交換会、そして壮行会を経て、いざバーミンハム市へ。天候不良でフライトがキャンセルになるというハプニングもありましたが、皆さんは十分に楽しんで来られたようです。

和田滋子さん

訪問したときはちょうど11月の大統領選挙に向けて民主党候補が決まらんとしているところだった。ホームステイ先であるペギーさんは、朝から、また車の中でもラジオで、夜には時間があればテレビで大統領選挙に関する最新の情報を聞いておられた。大統領選挙のしくみを丁寧に教えてくださったり、自分は誰を支持しているかはっきり述べられたりと、さすが民主主義の国、一市民として政治に積極的に参加するというペギーの姿勢に教えられた。

出来る限り「素顔のアメリカ」を私たちに体験させてあげようといろいろ気を配ってくださったペギーに心から感謝申し上げたい。

小山さん、宇野さん、太田さん、和田さん

小山真季さん

ホームステイの５日間は一番心に残るものとなりました。私たち４人（宇野いづみさんといっしょにホームステイ）が本当の家族のように感じる瞬間がありました。これはRoberts夫妻が単なる訪問客としてでなく対等な立場で接してくれたからだと思います。この先私が人と接するとき、相手にこのようなうれしい気持ちを少しでももってもらえるように、対等な立場でということを心がけたいと思っています。この12日間に感じたすべてのことをこの先ずっと忘れずにいたいと思っています。

宇野いづみさん

"憧れのアメリカ・大好きなアメリカ"「そのアメリカでホームステイをして、異文化体験をしたい。日本とは違った歴史・文化・伝統を持つ人々と一緒に生活することで、自分自身の視野を広げたい。」そんな気持ちで第13回滋賀県ミシガン州友好親善使節団に応募しました。

短い期間にもかかわらず、EarlとSusieは、実に様々なことを経験させてくれました。そのすべてが私にとって、かけがえのない経験になったということは言うまでもありません。

今回思い切ってこの使節団に応募して本当によかったと思います。なぜならEarlとSusieをはじめ、アメリカという異国でたくさんのかけがえのない人達と出会えたから…。

太田善定さん

私はこの団に参加させて頂き、人生で財産となるようなことがたくさん体験できたことを非常にうれしく思う。アメリカでホームステイをさせてもらい、また壮大な景色を目の前にして、そして多くの現地の暖かい方々、一緒に行った日本人の方々に触れて精神的に少しは大きくなれた気がする。それは何故だろうか。私が思うにそれは、普段それぞれの個人が囲まれている環境とかけ離れた所で生活したからであり、また別の個人が「確かにそこで生きている」ということを実感でき嬉しく思ったからであろう。

（第13回滋賀県ミシガン州友好親善使節団栗東町使節団報告書より抜粋）詳しくは報告書をご覧ください。

読者コラム

日本人のご両親が３人の子供と共に移り住んだブラジルのグァタパラで、４人目の子供、ブラジル人として生まれ育ち、現在は栗東町に在住の河野幸栄さんが感動的な原稿をお寄せくださいました。

ブラジルで育って

Elisabete Yukie Uehara Kawano（河野幸栄）

ギラギラした太陽に透き通った青空、そして頬をなでるさわやかな風、自然の恵みがこぼれそうな国。それが私の故国、ブラジルです。

今から36年前の1964年（昭和39年）、長野県よりこの地へ渡った両親のもと、私は三女として生まれました。当時の状況について鮮明な記憶はありませんが、朝早くから夜遅くまで一生懸命土まみれになって働いた両親の“日焼けした顔から覗く白い歯”、“充実感に満ちた笑顔”はよく覚えています。家族は両親と三男四女の七人兄弟で、忙しい母に代わって姉たちがよく私の面倒をみてくれ、さみしく感じることありませんでした。ときには喧嘩もしましたが、兄弟仲良く助け合っていました。

高校卒業間近かのある日、恩師にグァタパラの教会に友人とともに呼ばれ、「日本に留学してみませんか？」と思いもよらない話がありました。それは、以前日本から来られた岡山ノートルダム清心女子大学の先生の下で児童学について勉強するというものでした。不安と期待が心の中で交錯していましたが、恵まれたチャンスであると喜んで留学の決心をしました。そして初めての日本へ。

1983年３月、桜の花咲く岡山に到着しました。そうして４年間、生活習慣の違いや高度な専門教育の習得について悩んだり、また苦しいこともありました。しかし先生方の親身になってのご指導や、初めて出会う私を暖かく迎えてくれた親戚の思いやり、めぐり合った良き友人の言葉に励まされて頑張ることができ、すばらしい学生生活を送ることができました。もちろん遠く離れたブラジルの両親や家族が支えになっていたことはいうまでもありません。多くの人々に支えられ、父母の祖国日本で勉強させて頂きました。

現在私は縁あってその日本で、日本人の夫と一男一女の四人家族で幸せに暮らしています。忙しい毎日を過ごしているうちに、いつのまにか両親がブラジルに渡った時と同じ年齢となり、はたして当時両親が決心したように、今の私が家族と共に遠い異国に渡り、暮らすようになったとしたら…。そのようなことを考えると、父母の苦労は想像以上のものにちがいありません。ただただ、私たちを育ててくれた偉大さに感謝するのみです。

もちろん私の両親だけでなく、同じ経験やさらにつらい思いをされた方々も数多くいらっしゃることでしょう。私たちの世代もその苦労を忘れず、その先人達の期待に応えるよう努力しなければなりません。私自身大きなことはできませんが、両親に見習い、子供達に愛を注ぎ、ブラジルと日本のその両方に誇りを持てるように育てていきたいと思います。

最後に、栗東町の皆さんとともに、国際交流のお手伝いをさせていただくことに感謝いたします。

読者コラムにご投稿ください

ＲＩＦＡ日本人会員・外国人会員どなたでも、またエッセイ、紀行文、詩、短歌や俳句など何でも結構です。採用分には薄謝をさしあげます。

郵便番号・住所・氏名・年齢・職業・TEL/FAXを添えて事務局までお送りください。なお、匿名を希望される方はその旨お書き添え下さい。